

INAF 最高顧問 谷口誠先生の「偲ぶ会」に参加して

佐渡友 哲（INAF 常任理事）

INAF 発足以来、最高顧問として私たちの活動を牽引され、ご尽力された谷口誠先生が、2024年1月14日に心不全のため逝去されました。93歳でした。何人もの方々が正月に電話でお元気な声をお聞きしていましたので、信じられないような訃報でした。去る3月15日に先生を「偲ぶ会」がアルカディア市ヶ谷 私学会館で午後2時から開催され、INAF から平川均理事長と佐渡友が参加しました。その際の状況を谷口先生への感謝の意を込めて報告させていただきます。

「偲ぶ会」は、谷口先生が代表理事をされていた一般財団法人 アジア・ユーラシア総合研究所（アユ研）と、同じく代表幹事を務められていた北東アジア研究交流ネットワーク（NEASE-Net）との共催で行われました。両研究所の役員を中心に、大学関係者、元外交官、ジャーナリスト、元官僚、研究所スタッフなど、約40名の参加者がありました。正面には遺影、右側には大きなテレビ画面が置かれた、シンプルな会場でした。入場の時から、6年前に収録された谷口先生の講演動画が流され、面影を偲びながら進められました。アユ研の高杉暢也評議員の司会で、黙祷、献花が行われ、故人の略歴紹介の後に、小倉和夫氏（元外交官）ら4人による弔辞がそれぞれ述べられました。

実は弔辞の前に6分間、谷口先生の歌声を聴くことができました。歌がお上手で、これまでも懇親会などで歌われていたイタリア語の「オーソレミオ」はじめ、ピアノの伴奏により3曲が映像から流れてきました。これは先生の米寿記念祝賀会で収録された映像です。いつもパワフルなお声で、マイクなしでも話されることがありましたが、歌われるときには特に声量が豊で、オペラ歌手のような身振りで歌われます。この元気なお姿に会場のみなさんは見入ってしまいます。筆者は何回かこのような場面に接していますが、初めて聴く方は驚かれたであらうでしょう。そして最後に、日本銀行にお勤めのご長男 谷口 健氏より謝辞がありました。弔辞の中でも、谷口先生の人柄、功績、行動力などが語られ、映像からはお元気な姿を回想できて、偲ぶ会にふさわしく有意義な1時間半でありました。

ところで谷口先生は元国連大使として知られ、私たちも時に「大使」とお呼びすることもありました。外交官になられる前の学びの原点は、一橋大学の板垣興一ゼミで学んだ経済学とアジア研究にあるようです。そしてケンブリッジ大学で当時異端の経済学者（谷口先生評）のショーン・ロビンソン教授から学ぶという、経済分野が専門の異色の外交官でありました。70年代に南北問題に強い興味を抱き、その後、UNCTAD の議長（1987年）やOECD の事務次長（1990～96年）を務められたのは、異色ならではあったに違いありません。その後帰

国されて、早稲田大学などで教授、岩手県立大学で学長を務められ学究と教育の道を歩みられました。大学に籠るのではなく、広く世界やアジア地域を視野に活躍されました。筆者は6年前の米寿記念祝賀会で述べられた先生の2つの夢を覚えております。それは第1に東アジア共同体を創設すること、第2に「**一帯体**一路」構想に日本が積極的に参加することでした。

谷口先生は外交官として欧米との関わりが強かったと思いますが、中国との関係やアジアの連携、国際秩序についても構想されておりました。「冷静な頭脳と温かな心」(A. マーシャル)が大切といわれますが、先生は温かな眼差しで東アジア諸国の国際関係を見つめていらしたと思います。国連大使時代に日本政府からの通達を無視したことがある、と隠すことなく発言されていたことを思い出しました。政府とは異なる考え方でもご自分の心に従った主張を情熱的に語る姿は、外交官らしくないと思ったものです。李 鋼哲所長は谷口先生と長いお付き合いと信頼関係が築かれていましたので、INAF の構想と活動内容に当初より期待と理解を示されておりました。INAF はいま、最高顧問を失いましたが、私たちは谷口先生の情熱と構想力を受け継いで、国家・民族そして世代を超えた新しい構想を模索することが求められていると実感しています。

今でもオンラインで登場する谷口先生の力強い声が聴こえてきます。谷口先生、ありがとうございました。INAF のメンバーと共に、心よりご冥福をお祈りいたします。合掌